

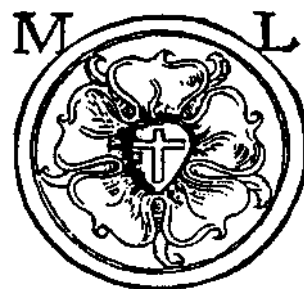


マスク（仮面）をつけて治療をする  
中世のペスト医者

# ルター 新聞

## Die Luther Zeitung

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所二ニュース・Nr. 74



### ルターと疫病

コロナの時代の中で  
考える

新型コロナ・ウイルス感染拡大が止まらない。全世界の人々が困っている。人と人との楽しい交流こそが、人生の意味であったのに、今やソーシャル・ディスタンスが推奨されている。なるだけ人に会わないように！ 人類史的異常事態！

しかし考えてみれば、人間の歴史は、疫病との闘いの歴史でもあった。聖書には、イエスが病者を癒した話が数多く記されている。

ルターの生きた中世末期も、ペスト大流行の時代であった。治療薬もなく、ペスト↓死であった。ヨーロッパの三分の一から四分の一の人々が亡くなったと言われている。当時の民衆の信仰もルターの神学も、結局この問題をこそ人生最大のテーマとしていたのである。

実際、ルター自身、このペスト流行期に公開書簡を発表し、疫病に対して人はどう考えるべきかを説いている。

さて二一世紀の今日。私たちはルターの思想をどう咀嚼し、コロナに対してどう対処すべきなのだろうか。（え）

#### 今号の内容

- 2面 ルターと疫病
- 3面 ルターのペスト書簡
- 4面 二〇一九年 秋の講演会報告  
ルターこぼれ話「ルターと髭」
- 5面 シリーズ「人間とルター」⑫  
結婚した人ルター  
ルターのことば
- 6面 ルターの研究者・名著シリーズ  
M・ローマン  
『致の書ールーテル教会信仰告白文書における聖霊と奉仕』  
「切手にみるルター」③④
- 7面 ルターに学ぶ教会論  
ープロテスタンティズム再考
- 8面 研究所二ニュース

# ルターと疫病

ルター研究所所長 江口 再起

二〇二〇年、この年は人類史に残る年となった。コロナ・パンデミックである。コロナ問題とは何か。大きく三点にしばって考えてみよう。(1) 人類と疫病、(2) 教会と疫病、(3) ルターと疫病(ペスト)である。

## (1) 人類と疫病

人間の歴史は、ある面から言えば、疫病との闘いの歴史である(疫病史観!)。特にグローバル化した現代、問題はより深刻になった。ひとたび治療薬やワクチンのないウイルスが出現すると全世界を襲うパンデミックになってしまう。

医療が発達したとはいえ万能ではない。限界がある。つまり人間万能主義では駄目なのだ(この事は、原発や地球環境問題に通じる)。逆から言えば、この宇宙・世界を「神の被造物」とみる視点が必要なのだ。そして神が世界を創造したと言うことは、神はウイルスをも含めて全ての「命」を造ったということであり、そこに全被造物の「共生」(ウィズ・コロナ)の本当の意味がある。ウイルスにはウイルスの本来の場所があり、人

間にも人間の住む場所がある。開発と称して、闇雲に人間が自然を破壊してはいけない。あえて言えば、ウイルスとも共生する、神の「すばらしき被造世界」ということを、もう一度考えたい。

## (2) 教会と疫病

旧約聖書で神殿があればほど重んじられたのは、そこで疫病の判定が行われたからであり、イエス・キリストが苦しむ病者に近づいていくその姿を見て、人々はそこに救いを実感したのである。またキリスト教がローマ帝国にあればど拡がっていったのも、初期のキリスト教徒が忌み嫌われ見捨てられていた疫病の人々の介護に果敢に挑んでいたからだと言われている。言うなれば、キリスト教は疫病と共に歩んできたのである。

さて、目を現代のコロナ禍に転ずればどうか。コロナによって、全世界の全ての教会で礼拝のあり方が変更を余儀なくされた。教会に人々が集まれなくなったのである。キリスト教史上、初めての事態である。リアル対面の礼拝から、文書による礼拝やオンライン礼拝へと試行が

続いている。特にリアルにパンとブドウ酒(キリストの体と血)をいただく聖餐式をどう考えるか。現在進行形の問題である。

## (3) ルターと疫病(ペスト)

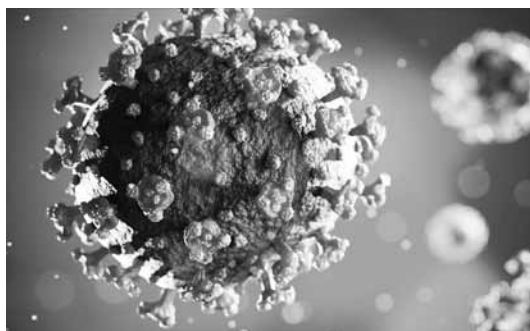
ルターの生きた中世末期はペストの時代であった。つまり死と隣合わせの時代であった。したがってルターの神学とは「メモント・モリ(死を忘れるな)」の神学である。

そうした中、ルターはある牧師の質問に答えて、ペストをめぐる公開書簡を書いている(「人は死を逃れうるか」。なかなか重厚複雑な書簡であり、様々な読み取り方ができるであろうが、私なりの解釈を記しておきたい。ポイントが二つある。一つは理論的な問題、もう一つは実践的な問題である。

まず第一。ペストが蔓延している時、人は(特に聖職者は)避難してよいかどうか。ある人は、信仰を持っているのを避難する必要なしと考えた。ここでこそ信仰が試される、と考えたのである。しかし、ルターの結論ははっきりしている。どちらでもよい。状況に応じて避難してもよし、留まってもよし。実はもっと大切な問題がある。それは、信仰に裏打ちされた隣人愛に基づく責任ということである。病者がいる時、医者は避難しない。苦しむ人がいる時、その人を一人にしてはいけない。つまり問題は、キリ

スト教的に言えば、隣人愛に基づく責任の問題なのだ。今日ともすれば、キリスト者は礼拝問題にのみ頭を悩ませているが、歩を一步すすめる「愛の業」こそが大事なのである。

そして第二、実践上の問題。ルターの信仰上の教えは、実に具体的である。彼はこう書いている。「薬を飲みなさい。助けになることは何でもしなさい。家や通りを消毒しなさい。必要もないのに人に会ったり、不必要な場所に行ったりすることは避けなさい」。人はペストに直面して、どう考えどう行動すべきか。コロナウイルスに直面している私たちに、ルターは同じことを語りかけることだろう。



## ルターのペスト書簡

### 牧会的かつ神学的であること

所員 宮本 新

一五二七年八月、ルターが暮らすウィッテンベルクにペストが流行した。選帝侯ヨハンはただちにウィッテンベルク大学をイエナに移転し、教授たちを避難させた。ところがルターは町に残り、罹患者や避難できない人たちの牧会に従事したのである。同年、少し遅れること

を濁しているのではない。ルターの真意は深くまた福音的である。パンデミックに際し、逃げるか逃げないかの二者択一に収れんされる問い方こそが問い直されるべきだとその書簡は物語っている。以下、ペスト書簡の特色を三点ほどあげて読書案内としたい。

シレジアの宗教改革者ヨハン・ヘスのところにもペストは流行し、動揺が広がっていた。そこでヘスはルターに助言を求め、それに公開書簡の形式をもって応じたものが「人は死に至る疫病に際し、逃げるべきか否か」(以下、ペスト書簡)である。「ルター・疫病・教会」の一次資料にあたるが、興味深いのはその内容である。

このようなことを尋ねる場合、逃げては駄目で逃げないことこそが正解、というのが考えられる前提である。逃げなかったルターに尋ねるのだから、なおさらのことであろう。ところがルターはそのような調子で書簡を記してはいない。逃げずに留まることこそが大事だともいつているが、逃げることも大切だとも述べている。曖昧なことをいってお茶

第一に、ペスト書簡は神学論文でもなければ、倫理の教科書でもない。キリスト者に向けられた牧会書簡である。「牧会的」とは、ある人がたとえ逃げたとしても牧会的関与が途絶えることはなく、また逃げなかったとしてもその関わりは続くことを見通した書簡である、という意味である。逃げるべきか否かという倫理上の問いに対し、シロクロつけてもお残された問題が牧会者にはある。そこに立つてルターは、逃げる者にも逃げない者にも共通してなすべきことがあることを助言する。自らの命を託する先としての神に祈ること。そうして自らに向けられた神の召しに応じて考え、その結果として、逃げる場合もあれば、逃げない場合もある。このことはペスト禍において逃げない者への称賛と顕彰と、逃げた

者への非難と強制が表裏一体となるスパイラルを断ち切る要点にもなっている。

次に、ペスト書簡はこうして逃げるか否かという問いを、「信仰と愛」をめぐる問いかけに思いを向け直すよう勧めている。ルターが見つめていたのは、疫病そのものよりも、「想像と恐れ」を媒介とした人間の病であった。とりわけ疑似的な神学が横行し、医学を軽んじ、予防と治療をいい加減に扱う人々をルターは斥けている。ペスト禍を通じて、ルターは信仰と愛が試みを受けていると述べているが、それはペスト禍を生き抜く鍵の在処を示している。

三番目に、ペスト書簡において牧会的であることは神学的であることを意味する。ヘスたちのような牧師たち、公的職務に就く者、そしてあらゆる間柄を生きる人々と、様々な人々にむけられた牧会書簡の言葉は、一貫したルターの神学的見解に裏付けられている。ルター神学の特色となる万人祭司こと全信徒祭司性や召し(召命)の神学がそれである。逃げる者も逃げない者も、神が共にあり、その境遇において召しだされているものがある。それゆえに、逃げる者にも逃げない者にも、書簡は福音を証言し、神の約束に心を砕くよう、うながしている。ゆえに、福音的！

人は神を前に、隣人と共に生きていく。この信仰と愛を鍵にしたところに希

望があり、励ましがあり、そして応じるべき責任と使命がある。ペスト禍において人々と分かち合いたいルターの神学的確信であり、それこそが凄惨な体験を前に、人を狂気から救い、なお本来の自分でありつづける道筋となる。ペストからコロナへと結ばれる線にこのような牧会的かつ神学的経路が確かめられる。

※日本語では故内海望先生の翻訳によるT・G・タツパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』(リトン刊)に収録されています。ルター自身の追記部分は割愛されているので書簡全体については以下の原典に当たってください。  
WA 23, 338-372, LW 43: 113-138



Peter Bruegel, the Triumph of Death (1562)

二〇一九年

# 秋の講演会 報告

JELC 日吉ルーテル教会牧師 多田 哲

昨年のルター研究所による秋の講演会は「ルターと日本」というテーマで、むさしの教会で行われました。最初に、江口再起先生が「ルターと日本」についての大きな流れを話してください、次に、青田勇先生が「佐藤繁彦とルーテル教会」について話してくださいました。「ルターと日本」という、一見すると直接の関わりがあまり無さそうに思われる両者ですが、それがむしろ、聴衆の好奇心を喚起したようで、約八〇名の方々が集まっていました。

江口先生のお話では、宗教改革と日本のキリスト教史が深く関係しているというところから始まりました。宗教改革への対応からイエズス会ができ、そこからフランススコ・ザビエルによる日本へのキリスト教伝来があり、禁教と鎖国があり、明治維新と富国強兵があり、敗戦と戦後があり、グローバル化が叫ばれる現代よりも遙か昔から世界は繋がって動いてきたことを改めて思わされました。また、日本におけるルターの受容としては、時代ご

とに分けて、その時々日本の神学者がどのようにルターと向き合ってきたかについて聞くことができました。結びは、未来のルターを目指し、日本からルター神学への貢献を見据えた展望をお話してくださいました。

また、青田先生は日本におけるルター研究の嚆矢の一人とされている佐藤繁彦について、実際の史料に基づいて丁寧に話してくださいました。佐藤繁彦の強すぎるほどのルター研究への熱心さが伝わってきました。異色の経歴や早世など、様々な事情で歴史の中に埋れかけていた佐藤繁彦という神学者の姿を現代の私たちに示してくださいました講演でした。

●ルター研究所 秋の講演会 ～ルーテル学院大学・神学校110周年記念～



マルティン・ルター



佐藤繁彦

日時 2019年11月10日(日)午後2時～4時  
会場 日本福音ルーテルむさしの教会  
(福地町1番地16号 TEL: 03-3359-8422)

●講演「ルターと日本」  
江口再起氏 (ルター研究所 所長)

●講演「佐藤繁彦とルーテル教会」  
青田 勇氏 (日本福音ルーテル教会牧師、元講師)

●主催 ルター研究所 (ルーテル学院大学・神学校共催)

入場無料

## ルターこぼれ話

### 「ルターと髭」

所長 江口 再起

ルターの肖像画は数多く残されているが、すべて髭がない。しかし一つだけ例外がある。髭の男ルター。なぜ彼は髭をはやしているか。それには理由がある。

改革運動をすすめた結果、ルターはヴォルムス国会で皇帝の喚問を受け、異端とされてしまった。そこで彼の味方の領主によって、人里離れたヴァルトブルク城に保護され、身を隠すことになった。当然、名前も身分も隠す必要がある。修道士でなく騎士、名前もルターでなくイエルク、また髭ものばした。と言うのも当時、修道士(聖職者)は髭が禁止されていたから、逆に髭をはやすことで身を隠したのである。髭の男「騎士イエルク」の誕生である。

ヴァルトブルク城で騎士イエルクは、孤独に一人で、しかし多くの仕事をした。新約聖書のドイツ語訳などなど。そしてやがて一〇か月後、再びヴィッテンベルクの町にもどり、改革者ルターとして以前にもまして運動をすすめたのである。髭はきれいに剃っていた。

そもそも髭をはやすかどうか、主たる理由が三つある。男らしさの象徴(？)、宗教上のルール、そして時代の流行である。宗教上のルールも時代により宗派によりまちまちである。おおむね中世の教会では修道士や司祭は髭は剃っていた。したがってルターも剃っていたのである。

さて、今日ではどうか。髭をはやすかどうかは、まったく個人の趣味の問題である。もともと似合うか似合わないかは、微妙なところだが……。



騎士イエルク 切り絵・竹田孝一

## シリーズ「人間ルター」12

## 結婚した人ルター

所員  
高井 保雄

中川浩之・画

ルターが修道士になったのは、大学時代に落雷で死にかけ、思わず守護聖人に祈り、「命があれば修道士になる」約束をした事による。一五〇五年、二二歳だった。

修道誓願は清貧、服従、そして独身を誓うものだが、父ハンスは、これを大いに怒り、「汝の父母を敬え」という神の戒めを知らぬのかと責め、父子関係は決裂した。この事を初め、長い苦悩と逡巡の末、ルターは修道士の独身制を否定する『修道誓願について（一五二二）』を著した。これを読んだ修道女のカタリーナ・フォン・ボラは、数名の同僚修道女達と共に女子修道院を脱出し、ヴァイッテンベルクにたどり着いた。が、当時は未婚女性の就職口など普通はなく、ルターは彼女達の嫁ぎ先をあちこち探すことになる。最後に残ったカタリーナはルターなら結婚すると言い、遂にルターはこれを受け入れた。

一五二五年、ブーゲンハーゲンの司式

により二人は結婚式を挙げた。時にルター四二歳、カタリーナは二三歳だった。当時の女性の結婚適齢期は一五歳前後だったので、ルターと共にかなりの晩婚だ。修道士ルターは、「最初に正式に結婚して家庭を持った聖職者」となった。領主は、二人の結婚に際し、ルターが居住していた修道院の建物を彼らに贈った。今日のルターハウスだ。

館の女主人となったカタリーナは毎朝四時に起き、庭で野菜を作り、ビールを醸造し、豚や牛や山羊を飼い、自分たちと若死にしたルターの姉妹の子ども達と下宿している学生達合わせて常時三十名程の共同生活を営むこととなった。この館の夕食でのルターの語らいが『卓上語録』となった。又彼が一家の家長として子どもの信仰養育をした事から、名著『エンキリディオン（小教理問答書）』が生まれた。これがルーテル教会の家庭における信仰教育の嚆矢となった。

人が苦しむ事がらを神もまた苦しむのである。

『キリストの聖餐について』（1528年）

ルターの  
ことば

所員 立山 忠浩

ナザレ人として人の姿をとった神の子イエス・キリストの十字架の苦しみは、神にまで及ぶ。今日、この言葉に衝撃を覚える者がどれほどいるであろうか。しかしルターの時代にあっては、異端的とも思えるほどの刺激的な表現であった。「神の不可受苦性」という古典的な理解のゆえに、全能の神が苦しむことなどあり得なかったからである。

ルターはすでに、「十字架の神学」が展開された『ハイデルベルク討論』（1518年）でも「受難の中に隠れていたもう神」という言い方をしているが、この言葉はそれをさらに踏み込んでいる。興味深いことは、この言葉を聖餐理解を論じた『キリストの聖餐について』（1528年）で述べていることである。ひらめき、いや思いつきとさえ思える言葉が、聖餐論の脈絡から離れて驚くほどの力を持つ。これがルターの魅力のひとつである。

日本でこのルターの言葉に魅せられ、誰よりも早く展開させたのが北森嘉蔵の『神の痛みの神学』（1946年）

である。エレミヤ31・20の文語訳「我腸（はらわた）かれの爲に痛む」（新共同訳では「わたしは…彼のゆえに、胸は高鳴り」）を契機として独特の神学を打ち立てた。私見ではルターのこの言葉が根底にある。

さらにユルゲン・モルトマンの『十字架につけられた神』（1974年）へと続く。因みに欧米では北森よりもモルトマンが先に、より詳しく取り上げられることが多いが（例えばマクグラスの『キリスト教神学入門』）、これが実態であり、日本の神学界の課題である。

さらにアウシュヴィッツの体験者エリ・ヴィーゼルの小説『夜』（悲惨な現実を前に「神はどこにいるんだ」と囚人らはつぶやいた）を挙げることは躊躇するが、ルターと共通した信仰理解を見ることは決して誤りではない。いつの時代も言葉に言い表せない悲惨な出来事が次々に起こる。ルターのこの言葉は今日においても力ある宣教の言葉となろう。



## ルター研究者・名著シリーズ

## マーティン・ローマン

## 『一致の書——ルーテル教会信仰告白文書における聖霊と奉仕』

JELC 三鷹ルーテル教会牧師 高村 敏浩

著者マーティン・ローマン (Martin J. Lohmann) は、アメリカ福音ルーテル教会 (ELCA) のワートバーク神学校 (アイオワ州) で、「ルーテル教会の信仰告白と伝統的遺産」准教授 (associate professor of Lutheran Confessions and Heritage) として教鞭をとる若手の宗教改革史研究者である。一月に神学生たちを引率して来日し、潜伏・隠れキリシタンや日本のキリスト教についての学びを主導したことに見られる彼のグローバルなキリスト教への関心は、同時にエキクメニカルな関心ともつながっている。

本書 (二〇一六年刊) は、残念ながら日本語訳はないが、ルーテル教会の信仰告白文書として知られる『一致信条書』(The Book of Concord) を、牧師や神学生、信徒に紹介する試みである。冒頭で、小学生のときにカトリックの幼馴染と一緒に宗教改革記念日にルーテル教会の礼拝に出て、自分が当たり前だと思っていたことに友人がショックを受け、また拒絶されたと感じた思い出を彼の神学者としての出発点として、ルーテル教会の信仰告白文書の意義を問う。信仰告白文書はいつたい、ルーテル教会を狭い

意味で定義して孤立した存在とするものなのか。ローマンは、「アウグスブルク信仰告白」、「アウグスブルク信仰告白弁証」、「シュマルカルデン条項」、「教皇の権力と首位権についての小論」、「小教理問答」、「大教理問答」、「和協信条」をそれぞれ紹介し、霊と隣人への奉仕という二つに焦点をあてつつ短く考察する。彼が頭かにするのは、そこにあるエキクメニカルな視点、つまり「唯一の、聖なる、公同、使徒的な教会」内での福音を明確にしようとする献身と葛藤である。それは言い換えれば、ルターが命をかけた「生きることの源としての福音を分かち合うこと」であり、「信仰によって生き、神を信頼し、私たちのうちに、私たちの周りに、また私たちを通して働く聖霊の働きに目を凝らすこと」(一五三—一五五)であり、今日の文脈においてそれを豊かな伝統を持つ他の教派と共に問い、ルーテル教会としての賜物を用いつつ共に答えを模索して行くことそのものである。ローマンの著書は、一六世紀のルター派信仰告白文書が、当時も、また今日も、エキクメニカルな「和」をもたらしえるものであることを主張する。

## 切手に見るルター ③〇

## 賛美歌

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一



ルターの教会改革の主眼は礼拝改革だった。礼拝の母国語化、説教運動と共に、彼は会衆が礼拝に参加するためにコラール(会衆賛美歌)を生み出した。自身 50 曲ほど作詞したと言われているが、同時代の音楽家たちがその協力者となった。

賛美歌はその後ドイツルター派教会で発展していくが、なかでもドイツの讃美歌王と呼ばれるパウル・ゲルハルト (1607 ~ 1676) とヨハン・クリューガー (1598 ~ 1662) の制作活動は秀逸であり、「血しおにそみし(血しおしたたる)」(教讃 81) はゲルハルトの、「主なるイエスはわが喜び」(教讃 322) はクリューガーの代表作である。二人はヴィッテンベルク大学神学部の卒業生であり、ゲルハルトがベルリン・ニコライ教会の牧師として着任した時、そこにはクリューガーがカントールとして在籍していた。

ゲルハルトの作詞力を見抜いたクリューガーとの活動が進んでいく。教会讃美歌にはゲルハルト作詞曲が 16 曲、クリューガー作曲曲が 15 曲収録されているが、両者の作詞作曲によるものは 2 曲だけである。

切手はゲルハルト生誕 350 年、400 年を記念して、1957 年及び 2007 年にドイツで発行されたものである。

# ルターに学ぶ教会論

## 「プロテスタンティズム」再考

所員 宮本 新

キリストを指さし説教するルター。宗教改革の町、ウィッテンベルク町教会の祭壇画にみられるそのルター像は、説教が何であるかを印象深く伝えている。だがこれは、祭壇画の構図の一部に過ぎない。中央には十字架のキリストが、そして、向かって左側、つまりキリストをはさんだ反対側にはみ言葉を書く人々（会衆！）が描かれている。その会衆に交じる形で幼き日の息子ハンスや早世した娘のマルガレーナも描かれている。かの日思い出のようであり、また終末的先取りの教会像でもある。現実の教会に込められた霊的現実を映し出しているのである。教会とは「聖徒の交わり」であるからだ。

この交わりとしての教会という理解を支えるのは、神のことばであるみ言葉が信仰者を生み育て、また群れなる教会を起し形成するという神学的確信による。ルターはここに「被造物としての教会」を考えていた。教会とはいわゆる建物や組織ではないといえども、かといって空虚な器でも道具に過ぎないものでもない。恵みにおける被造物である

の視点がルターにはあった。このようなルター派・プロテスタントの教会論の未来はどこに向かっているのだろうか。その検討の道筋は複数あるだろう。たとえば、アウグスブルク信仰告白第七条——福音の純粹な教えと聖礼典の正しい執行——の再確認。これからもそのミニマリズムは要点になるがこれに終始する教会論というわけにもいかない。宗教改革の脈絡で言えば、強力な「筋肉と背骨」（マクグラス）を伴う教会を形成したのはカルヴァンであり、また宗教改革五〇〇年のカトリック教会との「共同の祈り」では、教会の使命と未来は人類的課題と軌道を一にするビジョンであり、その世界性の確認があった。そこで、あらためてルター—エキュメニズム—世界性を視野にする教会論が必要になる。幸いなことにこの課題は新しくもあると同時に先人的働きに満ちている。ここではティリッヒに聞いてみたい。

今から一世紀も前、すでにティリッヒはプロテスタンティズムの終焉について真剣に論じ、その最終局面における教会

固有の使命を掴み取っていた。ティリッヒによると、教会が自らを、世俗的なものと異なるなにかとみなし、別のなにかになれるかのように目指し振る舞うことは錯誤である。教会は「化体的共同体」ではないからだ。しかしながら、神の恵みに対しては、「直覚的直観」に開かれ、知覚される「顕現」があり、ある種の透視する力が教会に備わっていることをティリッヒは認めていた。そのようなプロテスタントの教会論には、抗議（プロテスト）と形成という二つの原理がある。プロテスタント的であることは、この有限なるものがあたかも別のものになるかのような「魔術的」な主張に対して抗議（プロテスト）し、同様に、他よりも際立ち目立ち意義あるものと主張したがる「偶像的」主張にあらがう（プロテスト）原理を保持している。しかし、これらは抗議のための抗議ではなく、神の恵みへの奉仕の業としてなされる。恵みが自由に、意のままに形成する働きに教会は開かれており、その顕現を知覚し、直観し、そして透視する。このような教会論を論じるティリッヒは、ルターに学び、そしてルターを超えて新世紀の教会の姿を見ようとしている。このプロテスタンティズムは、教会の可能からはるかかなたにある「プロテスタント的世俗性」のヴィジョンを提示する。ひと言でいえば、この世界で神を前に、隣人と共に精一杯に生きてみる、というこ

とになる。そこにディアコニア（奉仕）やデイダケー（教育）の連携的宣教像が浮上するが、その焦点は、冒頭の聖徒の交わりの教会と同様である。神のことばは世界に放たれており、そこに生きる人間をも生かし、社会を形成する力になる。ここで神のことばに創造のみ業をみるルターが重要になってくる。教会に集い、み言葉に聞いて、私たちは神の造られた世界に目を見開いていくように招かれているからだ。



ウィッテンベルク町教会の祭壇画下方部。

# 研究所ニュース

新型コロナ・ウィルス感染の拡大にともない、ルーテル学院大学・神学校の活動も変則を余儀なくされています。授業もすべてオンラインで行われており、ルター研究所の活動も例年とはいろいろ違う動きとなっています。

## ● 牧師のための臨時ルター・セミナー

例年六月には牧師を中心に信徒も交えてルター・セミナーが開催されてきましたが、今年は中止。しかし、教会にとってもこうした非常事態ゆえにこそ、むしろ



る研究や意見交換が必要と判断し、急遽六月に毎週連続三回、牧師を対象に臨時ルター・セミナーをズーム（ウェブ会議方式）で開催しました。テーマは「ルター、疫病、教会」。第一回六月一日の発題は「ルター、疫病、教会」今、考えるべきこと（江口所長）、第二回一九日の発題は「ルターとペスト」（宮本所員）、第三回二五日は教会現場からの報告として多田哲牧師（日吉教会）、竹田孝一牧師（大森教会）の発題がありました。参加牧師はそれぞれ約三〇名でした。（※なお発題の内容については、本紙二面、三面をご覧ください。また関連して本年度中に刊行予定の研究所の紀要「ルター研究」一七巻の特集は、『宗教改革と疫病』を予定しています）。

## ● 公開講座

今年（二〇二〇年度）のルター研究所の公開講座は、すべて対象を神学生・学院生に限定して開講されることとなりました。前期は「ルターと聖書」（担当・江口）、後期は「ルーテル教会」（担当・石居、宮本）です。

## ● 二〇一九年「秋の講演会」

昨年十一月一日、秋の講演会が開かれました（会場・むさしの教会）。主題は「ルターと日本」。参加者約八〇名、たいへん盛会でした（※くわしくは本紙四面をごらん下さい）。

## ● 「ルター研究」十六巻発刊

研究所の紀要「ルター研究」一六巻が二〇一九年一〇月に刊行されました。「ルターと聖書」特集号ですが、所員以外の諸先生方からもご寄稿をいただき、計一一本の論文が掲載された充実した論集になっています（※内容目次については下段をごらん下さい）。

## ● 献金のお願ひ

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（二〇〇万円）と皆さんのご支援（約一五〇万円）で成り立っています。二〇一九年のルター研究所への指定献金は八三万六二〇〇円でした。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願い致します。

（所長 江口再起）

## 「ルター研究」第16巻 目次

「ルターと聖書」

— 現代に置かれている聖書に着目して —

宮本 新

「信仰」から「真実」へ

— 『聖書協会共同訳』のピステイス (pistis) —

立山 忠浩

カトリック教会の教会法秩序と

ルターへの聖書観の対比的考察 高井 保雄

聖書の無謬性と神のみことば 高村 敏浩

ルターと翻訳

— 翻訳の神学のために —

江口 再起

ルターとドイツ語

— ルター訳聖書のドイツ語とその新高ドイツ語成立への影響 —

多田 哲

「聖書序文」にみるルターの信仰と神学

石居 基夫

ルターの「信仰」を問う 末竹 十大

Why Lutherans sing what they sing

— ルーテル教会における賛美のことば —

伊藤 節彦

再考 バッハは、なぜ《口短調ミサ曲》を作曲したのか？ 加藤 拓末

ルターから今を考える

— キリスト教史における臨終の伝統とルターの死の理解を手がかりに — 小田部進一



ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三ー一〇一二〇

電話 〇四二二一三ー一四六一

発行責任：江口 再起（所長）

e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp